


 受賞の言葉

すがやま しんじ

80年東京外国語大卒。89年東京大大学院経済学研究科博士課程修了。11年東大より博士号(経済学)を取得。09年より東北学院大経営学部教授。57年生まれ。




---

 「日本的」雇用の過ぎ去らない過去

東北学院大学教授 菅山真次

新卒就職・終身雇用を常識としてきた日本。このような常識からすれば、就職とは、学校を卒業するまさにその時点において、ある特定の会社に「就く」ことを決める一回限りの選択に他ならない。現代日本社会は、このようなものの見方・考え方が一般化しているという意味で、「就社」社会と呼ばれるにふさわしいといえる。

本書は、「就社」社会・日本の歴史的成り立ちを、これを特徴づける「制度」に注目して、「ホワイトカラーからブルーカラーへ」をキーワードに解き明かしたものである。結論的にいえば、学校卒業が間断なく就職へとつながる仕組みや「日本的」雇用慣行が、一般労働者にまであまねく広まったのは1950年代以降のことだった。しかし、これらの制度は戦後忽然と現れたわけではない。その種子は、西欧からの技術移転を軸に進められた日本の産業化の過程それ自体のうちにすでに胚胎していた。比喩的に言うならば、それは産業化のスパートとともに発芽・成長し(日清・日露戦争前後期)、やがて大きなつぼみをつけ(戦間期)、そして苛烈な夏の暑さの中で開花した(戦時・占領期)。むしろ、高度成長期は最後の結実の秋にあたっていたとみるべきである。この長い進化のプロセスは、最初ホワイトカラーの上層で発生した制度が、ホワイトカラーの中・下層へ、そしてブルーカラー労働者へと、段階的に下降し、拡延していった歴史であった。「日本的」制度の特質は、こうしたダイナミックな進化の過程そのもののうちにもとめられるべきであろう。

本書を書き終えて、あらためて感を深くしているのが、伝統が持つ重み、ないし歴史経路依存性の大きさである。過去はただ過ぎ去ることはない。それは、新卒就職・終身雇用がすでに過去のものとなったといわれる今日においても、なお真実である。いま、もとめられているのは、「日本的」伝統が孕む問題性に鋭く自覚的でありながら、なおかつ、その最もすぐれた部分を生かしていくという視点に立つ、制度改革へのアプローチなのではないか。今回の受賞は大変な荣誉であり、これがきっかけとなって歴史的研究の有効性が再認識されるならば、私にとって望外の喜びである。